

# 立場が変わると何が見える



～その1 養育者と子どもの立場から～

坂口 伊都

## はじめに

戦争のニュースが日々取り上げられ、戦争の悲惨さ、止まらなさを思い知れと言われていたようで、己の無力さを痛感させられます。コロナ感染の方も終わりが見えず、明るい話題に出会えない日々が続き、息苦しさを感じます。そして私事ですが、この4月から施設職員となりました。50歳を超え、宿直業務をやっている体力があるかの自信もなく、不安だらけでしたが、チャレンジすることにしました。残念なことに体力不足は、日々痛感することになっています。周りの職員の方々に脱帽です。全く違う景色が4月から広がり、自分が何と無謀なチャレンジをしてしまったのかと実感しているところですが、体力が続くまで、頑張ります。そして、マガジンの連載も新たなものにいたしました。私は、これまでいろいろな体験をすることで知ることが多くありました。そこで、「立場が変わると何が見える？」と題して、実際の立場になって見えたことを書いていきたいと思えます。

実際に経験してみて、想像と全く違うと知ったのは養育里親の時でした。養育里親をするまでにだいぶ悩みましたが、実際にしてみて初めてその大きさに気づかされました。想像では、家族の中に温かく里子を迎え入れる感覚なのかと思っておりましたが、里子が入ることで今まで気づいてきた家族のバランスが崩壊しました。崩壊して更地になり、そこから里子を含めた家族バランスを再構築していくことになりました。子ども一人の生活を支えることは、簡単ではないと思知らされました。

里子の行動化が激しくなり、その対応を背負うことが増えた時、動悸等の身体症状が私の中に起こりました。家族、同僚、児童相談所のワーカーと状況を共有しましたが、私の気持ちが癒えません。知ってもらっても手立てがなければ、何も変わらないという思いになり、落ち込みが回復することはありませんでした。里子と何とか関係を修復したいと願っていましたが、自分一人ではどうにかできるとは思えず、八方塞がりでした。里子だけでなく、実子との間でも関係が綻びることがあります。その子どもが、自分の気持ちを話せばいいですが、なかなか言葉にできない子もいます。腹を割って、話し合いができれば、先を見通すことができますが、話し合いが成立しないと困ります。私以外の誰かが話して

くれるのではないかと期待しながら、自分が無能に感じ傷つきます。自分の傷つきを話そうとしない子どもと向き合うことは、非常に辛いことです。どこで歯車がずれてしまったのだろうと後悔して、次は自分から子どもへ話しかけることに恐怖し、悪循環にどんどんはまっていきました。

人は、仕事や家族の中で様々な立場に立たされます。例えば、職場で、上司のやり方を批判していた人が、その上司の立場になると批判していたことをその人も同じようにしていることも多く見かけます。近所の遊園地に行ったことを子どもの時は、ものすごく遠出をしていたのだと思っていたけど、こんな近所だったのだと大人になってから知るということもあります。同じ自分でも、年齢を重ねたり、立場が変わることで感じ方が変化したり、価値観が入れ替わるということも起きます。人は行動を選択しますが、その時に自分の身体を通して何らかの感情も出てきます。その時に湧き上がる怒り等の感情に支配されると、上手くコミュニケーションが取れなくなることがあります。自身の立場が報われないと、相手に対して何故してくれないのかと、相手を非難することで精一杯になります。本当は、お互いに分かち合う力があるにも関わらず、衝突が続きます。そこで、立場が変わると何が見え、何が見えなくなるものがあるようです。その辺りに焦点をあててみたいと思います。どうぞ、最後までおつきあいください。

## 親の心子知らず

まず、衝突が起きやすい関係は子どもと大人の間が思い浮かびます。親（養育者）と子、教師と生徒というところでしょうか。大人にも、子ども時代がありました。子どもの頃、親に注意されて「今やろうと思っていたのにやる気なくした」と思うことがよくありませんでしたか。大人は子どものことを何もわからない、わかってくれないと不満でした。その経験から、親になってすぐ子どもに注意するのではなく、子どもの様子を伺いながら、待つだけ待つから〇〇しないの？と気を遣って声かけをしましたが、子どもから「今やろうと思っていたのにやる気なくした」と言われてしまいました。親の私は、愕然としました。これだけ気を遣ったのに、結局こうなるのだったら、気を遣うだけ無駄というものです。

私は、自分の親とは違う行動をとったつもりでしたが、もしかしたら私の親もすぐに注意していたのではないのかも知れません。子どもから見たら、親が自分の様子を見守っているということに気づかないだろうし、子どもの立場では、親が自分の状況を何も見ずに言っていると思うのでしょう。

親が子どものことをいろいろと思い悩み、少しでも子どものためになるように試行錯誤を日々重ねていますが、その気苦労ほど、子どもに伝わりにくいものはないのでしょうか。私自身も親に「あんたにもいつか私の気持ちができる時がある」とよく言われていました。そんな話をする親の印象は、親は自分の思いばかりを優先させて押し付けてきて、子どもの気持ちを全くわかろうとしないくせにでした。親になって、自分よりも子どものことを

優先してやってきたつもりで、子どもを叱っている時間よりも子どもを想う時間の方がずっと長い感覚でいますが、子どもの印象に残るのは、叱られた時で、それも親が怒り過ぎたかなと後悔するような場面だとわかります。親としては、不条理だと叫びたくなります。

家庭でも児童養護施設等でも、子どもの生活をケアする日々を送ります。食事、掃除、洗濯と家事をこなしながら、子どもの様子を見守っています。ハンバーグを作って、美味しいと言われれば嬉しくなって、また作ろうと思ひ、日々の労力が報われた気分になります。逆に食事を用意しても食べなかったり、文句を言われたら、もう二度と作るもんかと怒りながら、気落ちもします。日々の生活の小さな一場面ですが、子どもの何気ない言葉や態度の影響は大きいと感じます。主婦の家事労働対価はいくらになるかという指標が出されたりしますが、金銭の支払いというよりも、家族のためにしていることを理解して欲しいという思いが先に立つのではないのでしょうか。実際は、理解する前に私がどれだけやっているか気づいてもらいたい。

例えば、洗濯を私がするのが当たり前になって、他の家族がそれをやろうとも思わなくなって、それならしないでおこうと思っても、洗濯物が溜まることに気づくのは私だけ。他の者は、それすらなかなか気づかず、そのまま放置されていきます。洗濯物が溜まるストレスにさらされるなら、誰にも期待せずにしてしまうと同じことが繰り返されます。家事をする者損です。家事を楽しめれば、損をしたという気分にならずに済みますが、家事の内容は多岐に渡っていて、好きなものも嫌いなものもありますし、できれば他の人がしてくれたら楽なのも事実です。生きている限り、終わりがありません。何もしていないのにお腹が減ることを恨めしく思ったり、自分がお腹が減っていても家族はお腹が減っているから献立を考えないとならないと思うと面倒くさくなります。家族に自分で何とかしてと投げかけることもできますが、何となく気が引けるのは、何なのでしょう。自身でも、家事の役割を引き受けてしまっていて、家族の中の役割を担っていると思っているのでしょうか。何とも言えず、貧乏性になっているようです。児童養護施設で働いてから

は、お昼から夜にかけての勤務が多いので、その時は晩御飯を作れないからと伝えてあります。宿直明けの時は、作る体力がないから弁当を買っています。晩御飯を作れるのに作らないのは引け目を感じますが、作れるような状態でなければ自分で何とかしてと言えます。自分の気持ちの持ちようで変わりますが、大きな変化が生活の中に起きないとそれも難しいようです。

毎日の生活は、流れるように過ぎていきます。その中で生活を支えていることに振り向いてももらえませんが、それをし続けることに大きな意味があると知ることが大切なのではないかと感じ始めています。子どもの生活を支えるということは、養育里親の時にも感じましたが、公私



の感覚を区別することに難しさがありました。里親の時は、自分達の生活の中に里子と過ごすことで、里子と向き合うために家モードでいるか、仕事モードでいるべきか悩み、里子と落ちついて向き合うためには、家で過ごす時も仕事モードでいる方が上手く回ると判断しました。しかし、娘からはいつものママではないと嫌がられました。娘からしたら、いつもの母と違って見えることは、無条件に母が自分の横にいるパーマネンシーを脅かされる感覚を抱いたのではないのでしょうか。逆に里子の方は、いつも同じようにいる存在に居心地の悪さがあったのかも知れないと思います。

里子と一緒に暮らす家族として受け入れてもらえない感覚がありました。その時は、なかなか信用されないなと悲しくなりましたが、施設職員や児相職員、学校の関係者等、子どもの生活の中で自分の担当が変わっていきます。いろいろな大人が自分が関わろうとしてくれても、別れの経験を重ね続けたら、大人に気を許すことを止めることも頷けることです。

## 表面に出ない部分

里親になって、里子は予想の斜め上をいく行動をすることによく驚いていました。先程まで、落ち着いて一緒に過ごすことができたとホッとしていたと思った矢先に何らかのトラブルを起こすという感じでした。息子も頭が痛くなるような行動をいろいろとしていましたが、調子のいい時、悪い時の察しがつきました。今は大丈夫だろうという予想がつき、それがある程度続くので、調子がいい時、悪い時期という感覚がありました。里子の場合は、調子の良し悪しの時期が一瞬にして入れ替わる感じで、少しの何らかの刺激で、あっという間にトラブルになる感じで、何が起きているのか見当が付きません。

息子も里子に向かって、「いろいろと気に入らないこともあるだろうけど、どうしようもなく子どもは親の保護がないと生きられないんや」と語っていました。神妙な顔で里子も聞いていましたが、息子の真意を理解することは難しかったらと思います。息子の行動に手を焼いていましたが、息子の中に一線があり、それを超えてはならないことを無意識的にわかっていました。成人を迎えた今でも、何かあれば親に訴えてきます。子どもにとって、親は最後の砦だと思えることの意味は大きのだと感じます。里子の行動に振り回される感じは、こういうところから出てきているのではないかと改めて思います。

親なんて、子どものために苦労しているのに気づいてももらえず、していることが当たり前と捉えられ、何か損ばかりしている立ち位置だと感じます。子どもには、無条件に隣にいて、自分を護り続ける存在が必要不可欠で、それは生活の中で見えにくいもので、意識されにくい部分なのだと思います。子どもは、できる限り生まれた家庭で育ち、それが難しいようなら養子縁組、養育里親、施設と「新しい社会的養育ビジョン」で優先順位が示されています。この意識されにくい部分に焦点を当てると、この順位になる理由がよくわかります。

現実には、そう簡単に割り振れるものではありません。特別養子縁組の話が進んでいても

直前で子どもを手放せなくなり、中断されることもあります。実親が子どもと分離する際、里親家庭を拒否し、施設なら了承するという話もよく耳にします。何らかの理由で、家庭で育つことができない子どもの居場所が必要となることは変わりません。

では、子どもが家庭で育てば、子どもが大人を信頼できるようになるかといえば、一概には言えません。大人は、子どもの行動を問題だと感じ抑制しようとする、子どもの話を聞くよりも先に否定、禁止、言っていることを信じられないということをしてしまいます。それが継続されると、子どもはどうせ信じてもらえないと説明することを諦め、激しく責められたり、叱られたりすることで深く傷つき、トラウマになることもあり、他者や自分自身を信用できなくなります。実際に、何でそんなことをしたの？と聞いても、上手く説明できずに話さなくなりました。息子も里子も、上手く話せないところはよく似ていました。娘は、よく話す方だったので、学校で何があったかや自分の気持ちをよく話していました。話ができる子は、言葉でのコミュニケーションができ、一緒に問題が起きても考えるということができました。

息子や里子は、話さないというより話せないなので、この子の中で何が起きているか一生懸命考えました。息子は、私が予想した考えを聞かせると反応し、時には泣き出すこともあるので、そこが辛いのだねとわかることができました。里子は、こういう気持ちではない？と聞かせると、目を白黒させていました。経験したことないことを言われ、何を言われているのかわからないという反応に見えました。それよりも、里母である私があなたとどうしたいと思っているか、例えば「ずっと一緒にここで暮らしていきたいと思っているんだよ」と言葉にする方が、わかりやすそうでした。でも、その話をした後でも、止めようねと約束したことを繰り返してしまうということが起こりました。わざとしているのではなく、本人にも止められないのだろうと感じました。止められないのは、複数の要因があるのだろうと思いますが、自分の中の整理をどうすればいいのかわからないのではないかと感じています。

息子の子育ては、何もかも初めてで、手探りでやってきました。なかなか寝てくれない、やっつと寝たと思ったら些細な物音で起きてしまったと神経質になった頃もありましたが、言葉を話せない赤ん坊相手にお腹すいたね？げっぷ出て気持ちいいねえ、アリさんがいっぱいいて面白いねえ等、語りかけていました。娘の時は、余裕もできて少々泣かれても、かわいい泣き声ね、もう少し泣いてね、お兄ちゃんに取られて嫌やったね、かわいいね、いい子ねとたくさんの言葉をかけてきました。言葉を少し話せるようになってからは、モノを投げたり、他の人を叩いたりしたら、あなたは叩かれてもいいの？叩かれたら痛いよね、嫌よね、〇ちゃんも痛いから泣いているよ、□□されて嫌だったのはわかるよ、でも叩くのはダメねと話しま



す。子どもが小さいと諭すように離せますが、子どもの年齢が上がるにつれ、大人の言い方もきつくなってしまいます。この諭すように言われることは、子ども自身も考えていく準備になります。言葉がわかるようになってからこそ、子どもの気持ちの代弁を子どもが聞くことで、自分の中でどのような感情が起きているのか、それをどう扱っていけばいいのかを考えていく経験の積み重ねがコミュニケーションスキルに繋がることのように感じます。